

行の賞として土曜日又は日曜日に父母教師が兒童を同伴して動物園に趣き博物館を見或は近郊に散歩を試むるがごときは最も適當の褒美ならんか。

女子の特性を發展せしむべし

澤生

稀に除外例として、筋骨逞しき女性なさに非ざれど概して骨格を以て論ずれば、女性は一般に男性に比較すべくもならず、時に板額巴御前の類なきに非ざれど、其體力を以て論ずれば、女性は決して男性の對敵に非ず、幽邃深遠の智識を以て比較すれば、今古東西を通じて概して女性は男性に及ばざる觀なきに非ず、果斷敢行の意志に於て比較すれば、女性は亦概して歩を男性に譲るとある

は事實なり。約言すれば女性は男性に比して、纖弱なり、溫和なり、弱く見ゆるなり、脆く見ゆるなり、然り、女性は果して眞に斯の如く脆く且弱きものなるか。

暴戾酷薄の君主も、下情を汲みし夫人のおとなしき諫言によりて、慈仁敦厚の君主と改まりし例あり頑迷殘忍の重罪の再三犯者すら、出獄の後、一朝家庭を造りて頓悟改悛し、全く其性格を變じて敦厚の人となりし例あるに非らずや。然らば即ち女性は、強ち男性中の最も強悍冷酷なるをすら醇化せしむる一種の力あるものなり。

やさしき姉の激勵によりて、平生優柔不斷の弟が敢然として永き戰爭に従事して雄々しく敵鋒に仆れしものあり、なつかしき母を見舞はむ爲に、單身敵の哨兵緜を潜りて暴風雨にまぎれて英吉利

海峡を漕ぎ渡らむとせし兵士ありしに非ずや。女性
性は斯の如く優柔なる男性をして勇敢壯烈ならし
むる一種の方あるものなり。

げに女性は、果して弱きものに非ず、強き男性
を左右する力あるなり、即ち男性よりも一層強き
處あるなり。

何物ぞ、女性をして玄かく有力のものならしむ
るものは、曰く唯一つあるのみ、高尚なる感情の
強きと之なり、慈愛と同情とに充ち満ちたる感情
之なりこれ女性の特性なり。

確かに女性の體格は纖弱なり、體格の纖弱は特
に此特性の發達に適したるなり、此特性あるが爲
に、女性は凡て脆く見ゆるなり、弱く見ゆるなり、
而かも此脆く弱く見ゆる處は、これ女性の最も強
き力ある處、最も高貴なる特性の存する處に非ざ

るか、抑亦總ての人間の最も高貴なる特性に非ざ
るか。

之を個人の發達に見れば、其幼少の年頃には、
行動は殆んど全く下劣の感情に制せられ、漸次年
長けて分別思慮を起し理屈に偏向し、所謂智の人
となり決斷敢行を偏重する、所謂意志の人となり、
涙少き一種寒冷なる人となる、更に齡を重ねて、
世の荒波の加減を知りし人は、かたくなの理屈を
脱して、人情を參酌し、優良高雅なる行動をなす
を認むるに難からざるべし。

之を一世の社會に察するに、下級の矇昧無智の
輩は、唯耳目の慾に追はれ劣情の爲に役せられ。
常人にありては、劣情を制し、眞面目なる高尚な
る人生に處せんとして、智の人となり、意志の人
となり、若し夫れ、孔子、釋迦、基督の如き人々

にありては、己が思ひのまゝに行動して、何の圭角もなく、かたくなる、處もなくして、道に合ふものといふべし、こは其行動が慈愛同情といふ高尚圓滿なる感情より發露せしものなればなり。

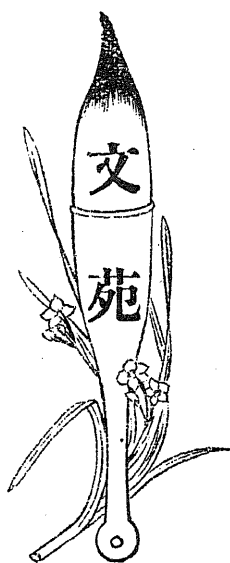
更に之を社會の歴史につきて考ふるに亦然り、野蠻未開の時代は劣情の支配する時代たりしなり續ぎて來りて、智の時代、意志の時代となりしなり、されど、智識の支配はあまりに理屈づめに過ぎ、意志の支配はあまりに冷酷に傾き過ぐるに至る、人間の天性は何時までも、斯かる理屈つばさ冷やかなる生活に満足するものに非ざるべし、然らば人類をして圓滿なる幸福なる理想の社會を造らしむるものはそも何物ぞ、いふまでもなく唯暖かき慈愛と同情とにあるのみ、故に曰く、將に來

るべき時代は高尚なる感情の時代たるべきなりと、何となればこは發達進歩の自然の順程なればなり、現今の如き優勝劣敗の著しき世の中にて、赤十字社の成れるあり、萬國平和會議の云々せらるゝあるが如きは、來るべき時代の萌芽にあらざるか。

此將に來るべき時代の特性たる慈愛と同情とは即ち女性が現在に有する特性なり。

是に於てか、女性の教育に關して、妻となり母となるべき穩當なる養成の方針を採るものにありては勿論のと、よしや、既に歐米諸國、殊に亞米利加に於て著しく存せる如くに、今後の我邦に於て、社會の經濟上の事情が家庭を構ふるを許さるに至り、餘儀なく獨居を以て終るべき女性の多く出でんとを憂ひて、嚴然男性と對峙せしめて、女

性の獨立を圖る方針をとるにもせよ、以上の所論によりて、毫も殊更に其特性を殺ぎ、之を曲げて、男性に似たる女性を養成する必要なきと明白にして、女性の教育の眼目は確かに、其特性を發展するに在るべきを信ずるものなり。



寫眞

和歌子

世の開くるにしたがひ、さまざまのたふとさきの、たよりよきものゝいでくるは、いどうれしきことになん。寫眞もこのひとつなり。このものよ。

其名の如く、人にまれ、景色にまれ、何にまれ、眞を寫すものにしあれば、こを見るは、其實物を見るに同じ。居ながらにして、外國の景色をながめ、千里の外友とも語るを得るは、げに此寫眞の徳とこそおぼゆれ。寫眞として、うれしからぬはなけれども、わきて、遠くへだゝれる友の許よりおこせたる、はらからなどの、伯母上が行きてのかへるさうつしつ、なごたのしきこといもかきそへておこせたる、いづれも物語るこゝちのせられてうれし。但しなき人の、打ち見ることに、涙の種なり。されども、これあればこそ、今もなほわりし係は忍ばるれ。と、思ふに、またうれしきものといひつべくや。おのれ、去年の春なりき。寫眞して故郷なる家に送りぬ。そのをりの返事に「よくもこえにけるかな。すこやかなるおもゝち物